

NOP NEWS

ノッブ

2018年

23

ニュー・オペラ・プロダクション

〒168-0064 東京都杉並区永福 3-20-3 TEL: 03-3328-0817 FAX: 03-3328-0655
e-mail newopera@jcom.home.ne.jp URL http://newopera.jp

明けまして、おめでとうございます。

私は生まれつき、おめでたく出来ているようで元日生まれ、新年で満 87 歳、昔風に言えば米寿ですが、私は普段、満年齢で通していますので、満 87 歳になった日でなく 88 年を生き抜いた日、つまり 2019 年元日に米寿を祝いたいと思っています。

昨今の世情を見ると、アメリカ大統領にしろ、日本政界、官界、財界のトップ連中にしろ、一体、何をやっているんだ、と眉をしかめることだらけで、良識ある国民がどれだけ不快に、恥ずかしく思っているかの想像力に欠け、林立マイクの前の口先だけの謝罪で済ませ、潔く職を辞し、大臣なら代議士を辞めて国民に与えた経済的損害は全財産を擲って償うという責任の取り方も知らない厚顔無恥さは国民の末端にまで影響を及ぼしているようです。人がどんなに迷惑しているかに思い至らず、場所柄を弁えずスマホを操作したり、人前で平気で物を飲み食ったり、年長者に道を譲ろうともしない。かつての礼儀正しく、マナーのいい日本人という海外での評判は地に落ちてしまいました。

さて、NOP は独力で組織を立ち上げた時から、有限会社の名のもと、必要に応じてスタッフ、出演者を集め、自らの主催により 13 回、市民や地域団体の依頼を受けて 50 回を越すオペラ公演に制作協力してきましたが、低迷する経済状況の中、国も地方自治体も支援を要請すると、「有限会社は営利目的の組織だから、助成しない」と、身銭を切ってまで文化活動を続けている大変さを全く理解しない担当者が多く情けない現状で、それならば、という訳で、昨年 6 月、有限会社であることを止めにしました。

経済開発機構（OECD）参加国で国民総生産 GDP に対する教育機関への公的支出の比率は 32 ヶ国中、日本はスロバキアと並び最下位、という事実を突きつけられても知らん顔をし続け、「文化振興に金を出したら、一体いくら儲かるんだ?」「人への思い遣り? 何だ」という人種が今、日本を支配しているのです。

そのような現状を知れば知る程、想像力を豊かにする仕事、芸術普及振興の大切さを痛感する毎日で、そのためには、力衰えたとは言え、少しでも役に立つことがある限りは、止める訳には行かない、という思いです。今年も出来る範囲のことを力の限り、やって行こうと思いますので、相変わらずのご声援をお願い申し上げます。

ニュー・オペラ・プロダクション代表 杉 理一

NOP オペラ・ビデオ鑑賞会講座第 11 シリーズを終えました

2012 年 10 月から東京文化会館会議室で始めた NOP オペラ・ビデオ鑑賞会講座は、その後、春と秋に 1 シリーズ 4 回、毎年続けて来て昨年秋、第 11 シリーズでは、第 1 回にレナータ・スコットとホセ・カレラスの「椿姫」。これは第 7 回 NHK イタリア歌劇公演の映像で、私はこの時、中継収録スタッフを取りまとめるデスク役を務めました。第 2 回講座ではカルロス・クライバーの指揮、フランコ・ゼッフィレルリ演出、カルメンがオブラストワ、ドン・ホセがプラシド・ドミンゴのという最

高の組み合わせによるウィーン国立歌劇場公演の「カルメン」をご覧いただきました。第 3 回にはメトロポリタン歌劇場の要請で NHK のスタッフが世界で初めてオペラの公演をカラーでライブ放送した「セビリの理髪師」ベルガンサ、アルバ、セレーニの人気歌手揃い、そして、最後の回には私が収録放送した藤原歌劇団創立 60 周年記念の東敦子さん演じる「蝶々夫人」をお楽しみいただき、いずれの回も、ビデオを見終わった途端、受講の皆さんから熱烈な拍手喝采をいただきました。

NOPが依頼を受け制作協力したオフィス・アプローズ公演 オペラ「夕鶴」 満員で大成功

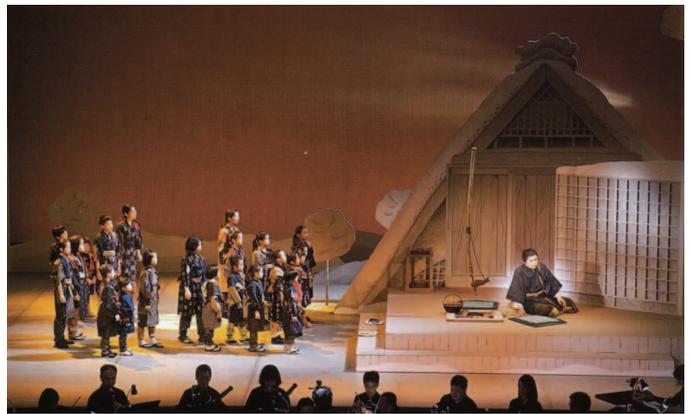
昨年、かつて二期会のテノール歌手として活躍され、現在はオフィス・アプローズというオペラ団体の芸術監督である砂川稔さんからのご依頼で、6月17日、墨田区の曳舟文化センターで行われたオペラ「夕鶴」の演出、制作協力をしました。会場は満員、主役「つう」と制作主任を兼ねたソプラノの稲見里恵さんが大活躍、与ひょうの青柳素晴さん、惣どの佐藤泰弘さん、運ずの清水良一さん、何と幼稚園児までも加わったグルッポ・ピッコリーニすみだという22人の児童合唱団のチビさん達も一生懸命、短い練習期間でみごとな舞台に仕上げることが出来て、音楽雑誌「音楽の友」の岸純信氏によるオペラ評でもお褒めの言葉をいただきました。



与ひょうに抱かれ幸せなつう



与ひょう（中央）を欺く運ず（左）と惣ど（右）



つうを遊びに誘い出しに来た子ども達と与ひょう

横浜市青葉区オペラを楽しむ会からご依頼の オペラ・ビデオ鑑賞会無事終了、新年は回数を増やして開催

昨年、ご依頼を受け、1月、7月、12月に横浜市青葉区オペラを楽しむ会のオペラ・ビデオ講座、各月同じ内容で2回、毎回、60人程の人が集まったの講座で講師を務めました。1月はNHKイタリア歌劇公演の名歌手達による名場面集、7月は私が制作演出、ザルツブルク・コンクールで受賞して大きな話題となった落語オペラ「死神」、文楽人形オペラ「鳴神」他、12月は藤原義江さん、柴田陸陸さん達の出演したテレビ・スタジオ・オペラの珍品集等をお楽しみいただきました。そのご好評により、今年は回数を増やし、1月、5月、7月、10月、12月にやって欲しいとのご依頼を受けました。目下、どのようなプログラムでお楽しみいただこうか、準備に専心しています。これも内容が固まり次第、ホームページでも発表しますが、ご関心のある方は「横浜市青葉区オペラを楽しむ会」近

藤恒夫さんに、お問い合わせ下さい。（電話045-901-5645）、講座会場は東急田園都市線、藤が丘駅下車、徒歩五分の藤が丘地区センター会議室です。此の講座も人数制限がありますので、お申し込みは、お早めどうぞ。



熱心な受講生で満員の藤が丘地区センター教室

3000人で創る真夏の音楽祭 大盛況 「静岡グランシップ音楽の広場」 字幕監修5回目

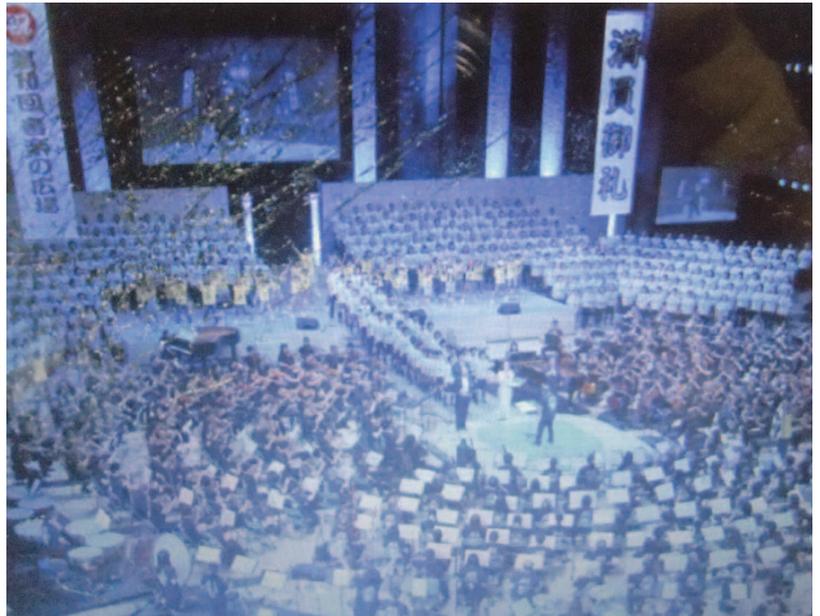
昨年8月6日、これで10回目になった、どでかいスケールの音楽会ですが、NHK音楽部時代の同僚、渡壁輝君が音楽監督・演出で、指揮は広上淳一、司会はNHKアナウンサーの深尾正明、歌手はテノール福井敬、ソプラノ吉田珠代、スペシャル・ゲストが布施明、以上の皆さん、そしてオーケストラも合唱も静岡を中心に各地から集結した人々。更に今回は、創立50周年を迎えた宮城まり子さん率いる「ねむの木学



テノール（福井 敬）、ソプラノ（吉田珠代）

園」の子供達が特別参加しての素晴らしいパフォーマンス。満員の会場は興奮の坩堝と化しました。

字幕は「アイダ」の凱進行進曲、「トゥーランドット」の「誰も寝てはならぬ」、レハールのオペレッタ「ジュディッタ」から「私の唇に熱い口づけを」他でした。



3000人の熱気に包まれたフィナーレ

NOP 講座 春には第12シリーズ開講予定です

第11回のシリーズを終えた後も、「是非、継続して欲しい」というご要望が多く寄せられたので、春に第12シリーズ4回を開催することにしました。今回もまた、東京文化会館の御協力が得られ、日時、場所が決まり次第、講義内容も、既に会員になって下さった方にはご連絡しますが、ご関心のある方はホーム・ページでもお知らせしますので、ご覧になり、受講御希望の方は会場に定員制限がありますので、早目にお申し込み下さい。

今回も、私の手許に保存してある、他所では見られないような貴重な珍しいオペラ映像を列挙し、第11シリーズ最終回にご出席の皆さんにアンケートの御協力をいただき、その中で御希望の多かったものを、ピックアップ、お楽しみいただく予定です。現在、決まっているのは下記の三作品（主な出演者）です。残る一作品は、御希望数が同じもの同士なので、近々、より多くの方に喜んでいただける作品を選び出す予定です。

(1) 1985年 ミラノ・スカラ座公演

「アイダ」(ヴェルディ作曲)

アイダ……マリア・キアーラ

ラダメス……ルチアーノ・パパロッチェ

アムネリス……ゲーナ・ディミトローバ

(2) 1981年 (オペラ映画)

「ヘンゼルとグレーテル」(フンパーディンク作曲)

ヘンゼル……ブリギッテ・ファスベンダー

グレーテル……エディタ・グルベローヴァ

ペーター……ヘルマン・プライ

(3) 2007年メトロポリタン歌劇場公演

「三部作」(プッチーニ作曲)

『外套』

ジョルジェッタ……マリア・グレギーナ

『修道女アンジェリカ』

アンジェリカ……バルバラ・フリットリ

修道女長……ウエンディ・ホワイト

『ジャンニ・スキッキ』

ジャンニ・スキッキ……アレッサンドロ・コルベルリ

ラウレッタ……オリガ・ミキテンコ

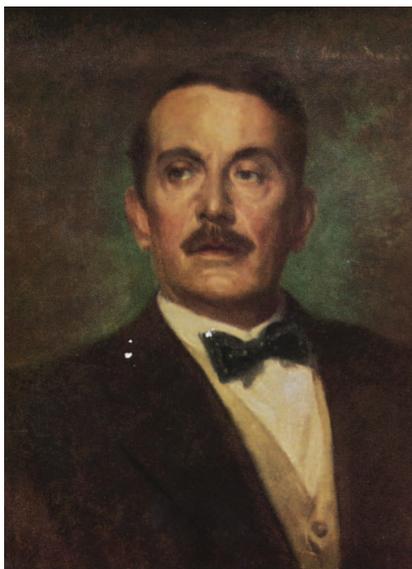
プッチーニさんとの不思議な繋がりエピソード

NOPオペラ・ビデオ鑑賞会講座第11シリーズの最終回、東敦子さんの「蝶々夫人」についてお話するため、様々な資料を読んで準備をしていた時、私の「また従兄弟」というのでしょうか、遠い親戚に当たる沢田寿夫君が中央公論誌に書いた文章を読んで、意外や意外、ジャコモ・プッチーニが「蝶々夫人」を作曲するのに、我が一族が貢献していたということに気づいたのでした。

ご存じの方も多いと思いますが、プッチーニはイギリス旅行でロンドンに滞在している時、デイヴィッド・ベラスコが書いた「蝶々夫人」というお芝居を観て感激して、これをオペラにしようと思いついたのだそうですが、ベラスコは、抑も、ジョン・ルーサー・ロングという人の同じ題名の小説に、強く心を惹かれて戯曲に仕立てたのです。では、ロングは当時、ヨーロッパでは殆ど知られていなかった日本を舞台にした「蝶々夫人」という物語をどうやって掘り出したのか、というと、それはロングのサラ・コレルという名のお姉さんが夫と共にキリスト教の宣教師だったからです。夫妻は布教のため、長崎に滞在していたことがあって、そこで見聞したことを弟に話して聞かせたところ、大変興味を抱いたジョン・ルーサー・ロングが小説に仕立てたという訳です。しかし、プッチーニは、その小説に基づいた戯曲をオペラにするに当たって、東洋の小さな国の事情は全然知らなかったもので、その時のローマ駐在の日本大使夫

人、大山久子に話を聞き、オペラの中で日本の雰囲気を出すため、彼女に頼んで、日本の歌を聞かせて貰ったり、日本のメロディーの入ったレコードを送って貰い、それを「蝶々夫人」の中で役立てたというのです。ただ、どの音楽が、どのような場合に演奏されるか迄は、教わらなかったもので、日本人が聞くと奇妙なところで、「宮さん、宮さん」や「君が代」などのメロディーがひょこっと顔を覗かせるという訳です。

この話に出た大山久子という人の娘が、同じ外交官で国連で活躍した沢田節蔵と結婚、その二人の間に来た子供の末娘が、私の母方の伯母なのです。つまり、プッチーニに「蝶々夫人」作曲の参考になるレコードを渡したのは、私の母方の曾祖母にあたる人だったという、不思議な不思議な縁のつながり物語という訳です。



ジャコモ・プッチーニ



大山久子

閑話休題

昨年7月初め、家内さわの郷里、岩手県の前沢町へ行きました。それは朝日新聞記者出身で前沢町の町長を三期務めたことのある岳父菊池陽一が1994年、92歳で亡くなってから、空き家になっていた築百数十年の百坪にもなろうと思われる堂々たる屋敷を遺族の総意で町に寄付したからです。そして、その旧家は介護施設に生まれ変わることになり、その開所式に私と家内は遺族として参列したのです。その式典の後、私達は同じ県内の大沢温泉で疲れた身体を休めました。

息抜きの旅は、その後、10月には52年目の結婚記念日に富山、金沢、北陸の旅を、そして、11月には山中湖近くの「とうざんの里」、富士五合、更に身近な井の頭公園(右の写真)で素晴らしい紅葉の森の中に身を浸し、日頃の疲れを癒し、明日への英気を養いました。

